

寝屋川市地域福祉計画推進委員会（平成26年度 第1回） 要旨

日 時 平成26年11月 7日 14:00～16:15

場 所 市立保健福祉センター 5階 会議室1・2

出席委員 香川副委員長 坂口委員 佐々木委員 白川委員 中島委員 長谷川委員
藤本英祐委員 藤本宜男委員 丸山委員 三和委員 山田委員 山本委員長
(名簿順)

欠席委員 なし

1 開会

[会議の成立について報告]

[稲留保健福祉部長あいさつ]

[委員・事務局職員等の紹介]

[経過の説明（要旨）]

- ・第2次寝屋川市地域福祉計画は平成23年3月に策定しており、この計画は寝屋川市の保健福祉のマスタープランとして位置づけられている。高齢者保健福祉計画、障害者長期計画などの個別計画を通じて、市民、関係機関、市がお互いに協力しながら推進している。
- ・当委員会は、地域福祉計画の進捗管理などを目的としており、平成24、25年度は年度末に進捗状況を確認した。今回は、委員や委員の所属する団体の行っている地域福祉に関する取組について、意見交換を行うことを目的に開催する。

[資料確認]

2 副委員長の選出 [議題第1]

- ・前回の委員会で早川委員を副委員長とすることが承諾されたが、選出母体である医師会の役員改選により委員の変更があったため、あらためて選出する。
- ・前回と同様に委員の承諾を得て、山本委員長により医師会の香川委員が指名、委員会の合議を得て、選出された。

3 各委員の地域における福祉活動等 [議題第2]

(事務局 資料に基づき説明)

[補足事項]

- ・前回の委員会で、行政の事業や活動だけでなく、民間の活動内容についても把握すべきという御意見をいただいた。地域福祉の趣旨からは、地域の活動のすべてを把握し、今後の方針を検討することが望ましいが、まずは委員の皆さんの活動内容や課題を共有するよう、委員個人または所属されている団体等での地域福祉に関する活動について、記載していただいた。各委員にはお忙しい中御協力いただき、御礼申し上げます。
- ・資料は、記載いただいた御意見を一覧表としたものである、他の委員の活動について質問があればお答えいただくとともに、課題について、他の団体や行政への要望も含めて、解決方法に関する御意見をいただきたい。

(山本委員長)

どこまで網羅したと言えるか分からないが、すごい資料ができ、寝屋川市では住民の方が熱心に活動されていることが一目瞭然になった。非常に重要な現状分析の資料なので、当事者の

方から説明などの発言をお願いしたい。

(白川委員)

総論的な議論では分かりにくいので、項目ごとに意見を求めた方が良いのではないか。

(山本委員長)

そのようにお願いしたい。本日の会議ですべての課題解決を議論するのは無理だが、当事者の発言を聴きながら、全員で共有するよう深めていきたい。

【(1) 生活を支援するサービスや活動の充実】

(山本委員長)

困りごとは人生のどの時期にもあるが、特に困り果ててしまっているときに、問題を地域で把握し、解決につないでいく取組について書いていただいた。

(長谷川委員)

ひきこもりやアルコールの問題を書いたが、特定疾患などの難病の人や、在宅で高度医療が必要な子どもと家族などを、保健・医療だけでなく福祉の方々のサポートもいただきながら支援している。それも、ひいてはまちづくりになると、いつも思っている。

(山本委員長)

長谷川委員が課題として挙げられたことは、非常に重い内容である。ひきこもりの大人の人の生きがいづくりや就労支援は壮大なテーマであり、「SNEP（孤立無業者）」という言葉も広まりつつある。私も昨日、大学で授業をしたばかりだが、明日、明後日は大学で研究集会を行い、秋田県藤里町で調査を行った社会福祉協議会の人々が報告される。こうした問題が増えており、高学歴の人が会社で壁にぶつかって、何十年も引きこもっている例もある。そうした人には就労支援が必要だが、市内にはほとんど場がないと書かれている。本日はこの問題に終始できないが、来年度は計画を改定するので、こうした問題も意識したい。

(長谷川委員)

アルコール依存の人への治療や支援の方針も変わってきていると聞いており、最新の動向も周知しながら、みんなで支援していければ良いと思う。

(三和委員)

前回委員会の資料には市民の活動が載っていなかったもので、それも加えたらどうかという議論から、今回の資料ができたという理解で良いか。いろいろ提案されているが、すべてをするのは大変なので、一番大事なものを選ぶことも大切だと思う。それをだれがするのか。

(山本委員長)

本日は問題を共有することが目的で、中身の検証はこれから行っていくので、「選ぶ」という議論は、地域福祉のアプローチとしては早いと思う。まずは現状を把握しながら、市内の特性・課題と資源をどう結びつけるかを、年度末に議論したい。資料に書かれた取組を全部知っていた人はいないと思う。例えば、大人の引きこもり人の問題も、寝屋川市で散見されるのであれば地域福祉の課題になるので、本日はさまざまな活動や課題を共有したい。

(中島委員)

生活の中の困りごとに関して、寝屋川市には地域包括支援センターが12か所あり、なんでも相談に乗ってくれる。佐々木委員の意見に「地域でさまざまな相談を受け、つないで支援している」と書かれており、まさに協働が見られて非常に良いと感じた。一方、「多様化する問題へのスムーズにできないときがある」ことが課題として挙げられているが、具体的にどうということなのか。

(佐々木委員)

民生委員児童委員は地域の担い手として一番身近なところで活動しており、さまざまな相談がある。自分だけではほとんど解決できないので、行政、地域包括支援センター、社会福祉協議会、ボランティア団体などに声をかけて支援につないでいる。また、地域でいろいろな行事

を企画し、高齢者を引っ張り出すよう工夫しながら活動しているが、個人情報の問題で、精神障害がある人などへの対応は本人からの申出がなければ難しく、頭を抱えている事例もある。

(白川委員)

次の項目に「相談のしくみはほぼできあがっている」と書いたが、コミュニティセンターエリアごとに「まちかど福祉相談所」をつくっており、昨年度は約400件の相談を受けた。相談の内容は、引きこもり、難病、アルコール依存症、就労、退院後の生活、成年後見制度、遺言書の書き方、消費者被害、勉強や趣味・活動、家族関係、近所とのトラブルなど多岐に渡っており、ほとんどのケースはそれぞれの専門機関につないでいる。

(山本委員長)

身につまされる問題がたくさん挙げられたが、相談できる人がいないという状況の中、真正面で受けて、前に進めるための交通整理をしていただいているのは心強い限りである。これが地域福祉の本質だと思う。

【(2) 相談やニーズを把握する取り組みの充実】

(山田委員)

地域包括支援センターを運営している。平成18年度から3年間は市が運営し、その後、まず6か所でスタートした。最初は名前すら分かっただけな状況だったが、広報やさまざまな活動を通じて少しずつ認知されてきた。今後は「地域包括ケアシステム」を構築し、地域が一体となってだれもが安全・安心な暮らしができるよう、センターの働きがますます浸透するように対応していきたいと思っている。

(佐々木委員)

民生委員は、地域包括支援センターができて大変助かっている。センターにつながれば動いてもらえるので心から喜んでおり、勉強会にも来てもらっている。

(中島委員)

地域包括支援センターは「よろず相談」をしているが、対象が高齢者だけなのは弱点であり、他の人も相談できる場が必要である。また、地域包括支援センターは、まだあまり知られていないので、もっと積極的に知らせる必要があると思う。私も担当の民生委員や福祉委員がだれなのかは知らないという状況なので、そうした点を補っていけば良いと思う。

(山本委員長)

地域包括支援センターは成果を上げているが、周知は改善の余地があるということである。

(藤本宜男委員)

私の地域はアップダウンがきつく、相談に行きたくても行けないが、空き店舗や空き家を提供してもらって3か所の集まる場所をつくり、最近では地域包括支援センターがそこにきてくれる。そうしたきめの細かい対応を行うとともに、コミュニティ形成の基になる「集まれる場所」が、多くできれば良いと思う。最初は高齢者の集まりだったが、孫を連れて来て凧づくりをするなど、小さなエリアでのコミュニティが積極的になっている、これが最も重要だと思う。

(山本委員長)

足が悪い人も行けて、地域包括支援センターなどの専門職との接点になるところを、もう少しきめ細かくする必要があるという意見である。これも次期計画に反映すべき項目だと思う。地域包括支援センターは介護保険の財源で行っているのが高齢者が対象となるが、相談する人にはそうしたことは分からない。まずは受け止めてもらうことによる心の安定は計り知れないので、そのための方法論を考えていくことも課題である。

【(3) 地域福祉についての情報伝達と理解の推進】

(坂口委員)

単位老人クラブや市の連合会で、いろいろな出前講座をしてもらっているが、参加できない

人への対応が課題となっている。地域包括支援センターから出張してくれるという話が出ていたが、小さい単位でもしてもらえるのか。

(山本委員長)

非常に重要な指摘であり、委員の皆さんのレベルの高さにワクワクする。情報が得られなかったり参加できない人への対応について、事務局としてコメントはないか。

(アドバイザー)

相談に関して、専門職が地域に入っていくアウトリーチという手法を進めることが、大きな課題となっている。来年度から生活困窮者自立支援の取組が始まり、いかに寄り添う支援をしていくかがこれからの福祉の課題になっているが、専門職だけでは無理であり、例えば、民生委員さんと専門職と一緒に動くことで、1 + 1 が 3 になることが大事だと思う。

(山本委員長)

「生活困窮者」と言うと経済的な問題が想像されるが、地域から孤立した人やゴミ屋敷の問題なども含めた取組が進みつつある。その中でアウトリーチという、いわば出前のかたちの相談が進んできて、情報の漏れがないかを確認するなど、きめ細かな取組が前進するのではないかと思う。

(事務局)

生活困窮者自立支援法が来年4月に施行されるので、市でも準備を行っている。経済的な面に焦点を当て、生活保護に陥る前の人を対象として多問題に対応することにしており、待っているだけでなく、出かけていくことも含めて検討している。また、子育て支援では、孤立しがちな家庭へのアプローチを以前から課題にしており、児童虐待とも絡んでくる部分があるので、専門職も含めて家庭訪問を徹底している。

孤立して活動に参加できない人については、地域包括支援センターに情報提供するなどして、対応させていただく場合もある。また、出前講座は少人数でも開催できるので、それらも活用して情報を伝える場をつくっていただければと考えている。

(丸山委員)

きめ細かな情報提供をしてほしいが、特に重要な防災無線が聞こえにくい。そうしたことについて、市はどう考えているのか、どこまで聞こえるかを検証しているのか。

(事務局)

担当課に確認し、次回の委員会で報告させていただく。

(山本委員長)

「やっている」というだけでなく、利用者からの反応も聴いてフィードバックしてほしいということである。

(白川委員)

福祉に関する情報は、元気なときは必要がなく聞き流してしまうので、いざというときに分かれば良い。いろいろな相談窓口ができていたので、その情報を流す方法を考えれば良いと思う。私の地域にはひとり暮らしの人が350人ぐらいおり、南北に長い校区なので、サロンは自治会ごとに行っている。先日実施したアンケートでは、サロンにいつも参加する人、たまに参加する人、参加しない人が3割ずつだった。参加しない人の中には身体の調子が悪い人もいたので、迎えに行くなどして連れ出す方法を考えることが課題だと思っている。また、来てもらったときにどんな話をするかが大事だと思っており、パターンを考えて情報伝達を行っていく必要がある。本日の資料も見せ方の工夫をしないと分からない。そうしたことも課題である。

(藤本宜男委員)

福祉の情報は、各組織からバラバラに入ってきて統一性がないので、住民はなかなか理解できない。三和委員が課題に挙げられているように、市が一元管理し、伝達方法を構築する必要があると思う。

(事務局)

一元管理の面での問題があることは認識している。情報発信は広報やホームページなどで行っているが、それらは見る人に必要な情報を選んでいただく必要があり、探すのが難しい面もあるので、ピンポイントに伝達する方法も考えていく必要があると思う。

(山田委員)

地域協働協議会の取組が始まっているが、その機能は、他の活動と重複しないのか。

(事務局)

地域協働協議会は「地域の課題は地域で解決する」という目的をもっており、地域福祉との兼ねあいは協議会の中でも課題になっている。オーバーラップする部分もあるので、どのような関係にするかを地域ごとに話しあっていると聞いている。

(丸山委員)

自立支援協議会がまとめることになっていたと思うが、それはどうなっているのか。

(アドバイザー)

自立支援協議会は、障害分野でさまざまな連携を進めるしくみであり、寝屋川市ではいろいろな会議をまとめるかたちで構築されている。そうしたしくみと他の分野をどうつなぐかは地域福祉の課題であり、地域でのしくみもつくっていく必要があるが、地域協働協議会は進行中なので、難しい部分もあるのではないかと思う。

(三和委員)

情報を受け取る市民の立場で地域の掲示板を見ると、いろいろな情報が出ているので、どれが必要なのかが分からない。情報が一元的に分かるしくみがあれば良いが、一度に進めるのは難しいので、どこかの地域でモデルをつくり、広げていくのが良いと思う。

(山本委員長)

例えば、デパートなどは「買いたい」という欲望をつくるように工夫されている。福祉の情報でもそうしたマーケティングが重要であり、利用者がどう思うかを考える必要がある。

(丸山委員)

地域包括支援センターの周知徹底について、以前に当委員会で「クリーンカレンダー」に書いてはどうかと提案した。そうすれば費用もかからないし、分かりやすいと思う。

(長谷川委員)

寝屋川市は、広報の特集記事をいろいろなテーマで考えてつくられており、良いことだと思う。

(山本委員長)

相談については、一般的にざっくり受け止めることと、専門に細分化することの兼ねあいが非常に難しいが、次期の計画では、市と委員のコラボレーションで妙案が出せると良い。

【(4) 地域福祉をすすめるつながりづくりの推進】

(山田委員)

昨日まで福島県で開催された研修に参加したが、東日本大震災で被災された方は、その経験を活かさないといけないという強い思いを持っておられた。村全体が避難しなければならないという状況を見て、私たちも自分の地域を故郷として、親しみを感じながら共生していくよう、地域福祉計画の中で総括的、具体的な方向性が出せると良いと感じた。

(坂口委員)

災害時のネットワークについて、市老人クラブ連合会に加入している単位老人クラブでは連絡を取りあっているが、未加入の自治会が60ぐらいあり、どのような状況なのかが分からない。

身近な単位老人クラブでは、介護を受けなくても良いような健康づくりや、災害への備えの取組等、いろいろな面で助けあっており、ホームページも公開している。単位老人クラブへの加入と活動を促進するために、市を挙げてPRしてもらえると良いと思う。

【(5) 地域福祉の担い手づくりの推進】

(三和委員)

担い手がいないと地域は動かないので、この項目が地域福祉の一番の課題だと思う。無償のボランティアには限界があるので、みんなでやれる方法を考えないといけないと感じている。特に、介護保険制度の改正を踏まえて取組を進めた市が、最も活性化するのではないかと思う。社会福祉協議会、老人クラブ、NPOなどに多くの人に参加し、謝礼や無償のボランティアなどで動けるしるみを、しっかりつくりたい。白川委員や佐々木委員の協力を得て運営している「高齢者サポートセンター」で一番困っているのは、市域の東部地域は、ニーズはあるがボランティアをする人が少なく、丘陵地なので他の地域から自転車では行きにくいことである。地域ごとにみんなで体制をつくれれば、寝屋川市はもっとよくなると感じているので、次期計画に盛り込んでほしい。

(藤本英祐委員)

私は府のボランティア連絡会にも参加しているが、そこでもメンバーが高齢化し、新しい人が入ってこないことが課題になっている。要因として経済的な問題もあり、例えば、社会福祉協議会が行っている運転ボランティアは、交通費も出ないので動けないという人もいる。年金の支給年齢も上がっているので、今後は活動する人がますます少なくなる。

(山本委員長)

ボランティアといえども負担があると持続可能性に響くので、経済的な誘因と社会貢献を両立するしるみを、寝屋川市から示したいということである。課題として取り組んでいきたい。

(三和委員)

高齢者サポートセンターで在宅介護を行ってきたが、全国的にみると、介護保険が始まった2000年に多くのNPOが介護保険の事業者になったので、10年以上経って保険で対応できないニーズがたくさん出てきても担い手がいらない。特に、地方に行くと社会福祉協議会の無償のボランティアしかなく、在宅の支援はできない状況なので、寝屋川市で先導的な取組ができれば良いと感じている。

(山田委員)

高齢者施設では職員を募集しても反応がない状況である。2025年を目指していろいろな施策が行われ、100万人の介護職員が必要だと言われているが、少子高齢化で働く人が減っており、青森県ではベトナムの大学と提携して人材確保に取り組んでいると聞いた。そうした切実な状況の中で、地域福祉の担い手づくりに力点を置かないと、どうにもならないと感じている。

(中島委員)

昔はもっと利己的な人間が多かったが、東日本大震災で国民の感情も変わってきたのではないかな。私も退職してから登録サポーターや元気アップ体操サポーターをやり、生きがいにもなっている。大きな災害が起きると多くの若者がボランティアに行くが、人が集まらない活動もある。そういう意味で、登録サポーターは実によく考えられていると思うが、全国的には広まっていないということなので、寝屋川市は進んでいると思う。福祉の仕事に就きたいと思う若者が少ないのであれば、賃金を高くしてPRすれば良いと思う。

(白川委員)

人材については分けて考える必要がある。例えば、地域での助けあい活動は、有償だと経済的に頼めない人もいるので、無償でないと難しい。また、社会福祉協議会が実施しているかぎ預かり事業はマスコミにも取り上げられているが、昨年度に緊急事態を発見した73件のうち、50%は近隣や友人が発見しており、福祉委員に声かけ・見守り活動をしっかりやるように言っても、あまり発見できない。そうした現場の実態もふまえて、どのような人材を確保するかを絞って知恵を出さないと、結論は出ないと思う。

(山本委員長)

微妙な部分の指摘であり、「人材」はどういう人なのかが読みにくいということなので、か

み砕いて伝わるようにしたい。

(三和委員)

担い手づくりに成功すれば、他の項目はすべてよくなると思う。

(藤本宜男委員)

私が住んでいる団地では、今まで駐車場の管理を自治会に委託していたが、今年度からは競争入札となった。これにより、管理業務として草刈りなども必要となったので、住民による活動として、有償ボランティアでやってもらっている。しかし、来年度も落札できなければ住民による活動は白紙に戻ってしまう。また、有償にした当初は、これまでの無償の活動との兼ねあいなどで現場でのトラブルが多かった。半年経ってうまくいくようになったが、有償の活動については線引きや住民の受け止め方も課題だと思う。

(山本委員長)

私は、交通費などは経費なので良いが、時間提供に対価を払うとボランティアではなくなるので、「有償ボランティア」が何を指すのかがよく分からない。しかし、違う意見の人もおられるので、決着を付けないといけない。

【(6) 地域福祉活動への支援の充実】

(白川委員)

現実問題として、地域にどんな資源があるのかが分からないので、どのような方法で出していくかを考えることが大事だと思う。そこを明らかにせずに「利用」と言ってもお題目になる。

(藤本宜男委員)

さきほどお話しした3つの拠点も、地域の資源を利用している。空き店舗を格安で提供してもらったり、掃除をする約束で空き家を使わせてもらっており、ストックはある。しかし、運営するには資金が必要になるので、それらをどう結びつけていくかだと思う。

(山本委員長)

「資源」とは何かを定義しておかないと、どこまで含まれるかが分からない。資源を開発することも必要で、そのためには人も要るので、「公」と「民」で知恵を出す部分になると思う。

(白川委員)

地域福祉では「特技をもった人材」という資源を見逃してはいけない。そうした人には頼み込んででも参加してもらうことが必要であり、それが地域協働協議会の意味だと思う。

(藤本宜男委員)

全く同意する。私たちのサロンをみても、場所をつくれれば、高齢者は経験や潜在能力を活かしていきいき活動してくれるので、大きな資源だと思う。

(中島委員)

この項目は、地域福祉活動への支援を行政が積極的に行うことだと考えたが、市や社会福祉協議会が行った事業の進捗状況では白紙になっており、どういうことかと疑問を感じた。

(アドバイザー)

計画に「地域の資源を活かす」と記述したのは、行政がなんでもできるわけではないので、地域に協力していただくのが前提だということである、市の職員が地域に行って資源を細かく調べることはできないので、まず地域で探していただき、それを市が支援するしくみをつくっていくという流れになると思う。

(山本委員長)

行政がイニシアティブを取ってコントロールするのを地域福祉と言うのはおかしいので、住民がいきいきと発案して活動する中で、実績が市民全体に見えて、足りない部分を行政が補助するというかたちにするということである。これは地域福祉の微妙な部分なので、次年度に議論したい。

【(7) 権利擁護や虐待防止のための取り組みの推進】

(山田委員)

地域包括支援センターで虐待対応を行っており、近隣からの情報などもいただいて動いているが、件数が多い。障害者虐待への対応はどうなっているのか。

(山本委員長)

寝屋川市内での施設や家庭での虐待は、どのような状況なのか。

(事務局)

各々の担当課に確認して、お答えさせていただく。

(藤本英祐委員)

「わくわく未来塾」では、戦中・戦後の生活体験の話を小学6年生にしており、校長先生からは「話を聴いて、子どもたちがいじめなどにも関心を持った」と言われているが、実施は8～9校に止まっている。広島への修学旅行がなくなってから減少したが、平和学習は基本的な人権として一番大事だということに、市や校長も気づいてほしい。寝屋川市は平和都市宣言をしており、戦争は福祉の真反対にある。権利を尊重する意識につながると思うので、もっと進めたい。

(白川委員)

権利擁護支援は法令に基づいて行うもので、発見したときにきちんとつなぐことが大事なので、専門部署が行っていく必要がある。一方、地域福祉的な考え方でみると「運動」である。「社会を明るくする運動」も元々人権擁護から起きたものなので、こうした運動を活発にするよう、標語を毎年募集するなどの取組をすれば良い。見て見ぬふりをするのが一番問題なので、こうした運動を市民に定着する方策を考えれば良いと思う。

【(8) ユニバーサルデザインのまちづくりの推進】

(丸山委員)

障害や高齢は「明日は我が身」の問題であり、だれもがなりうることだという観点で、自分の問題として考えていく必要があると思う。

(山本委員長)

佐々木委員も書かれているが、歩きスマホが大きな迷惑になっている。こうしたことも、心の中のバリアの問題である。

(藤本英祐委員)

先日、公民館で文化祭が開催されたが、点字ブロックの上にパネルが置かれていた。公的な行事でもそのような状況が起きるのは、身につけていないということであり、子どもからの教育が大事だと思う。

【(9) 健康と生きがいづくりの推進】

(中島委員)

退職してじっとしていると身体が弱ると思い、市の広報を見ると身体を動かす教室やサークルがたくさん載っているのを見て参加している。健康には食事も大事だが、そうした講座もある。自分で1年間続けてみて、健康に役立っていると確信しているので、もっとPRし、閉じこもっている人なども参加するようにすれば、健康や福祉に大きく貢献すると思う。

(丸山委員)

この項目を進めるには、社会参加しやすい環境づくりを考えないといけない。私も脳梗塞をして歩きにくくなったが、以前とくらべてベンチが非常に少なくなっており、足の悪い人なども出ていきやすい環境をつくらないといけない。

(中島委員)

実際に、ベンチの数は少ないのか。

(事務局)

多いか少ないかの基準がないので、判断は難しい。

(丸山委員)

現実に取り外されているところがあるので、状況をまとめてほしい。休めるところがないという苦情はかなり聞いており、ベンチなどがないと、なかなか外出できない状態だと思う。

(三和委員)

健康や生きがいづくりは、すべてを行政に頼るのではなく、自分でできる場所をつくる必要があると思う。元気な高齢者が活動するところを民間でつくれば、介護保険の費用も減ると思うので、そうした社会を市民がつくらないといけない。

(丸山委員)

ベンチについても、行政がつくらなくても知恵を出せば、広告料でできると思う。

(白川委員)

ベンチも必要だが、トイレの問題が大きい。10年ほど前に、各公民館のトイレの入口を外側にも付けて「市民福祉トイレ」にして、市が水道代を補助するよう提案して考えてもらったが、実現しなかった。

健康づくりはみんなが考えていることであり、私の地域では公民館の前で毎朝ラジオ体操をしている。最初は2～3人でやっていたが徐々に増えて、今は30～40人が集まり、来ない人がいると声をかけるようになっている。これが地域福祉で一番肝心なところだと思う。こうした活動を行政が進めるとろくなことにならないので、地域協働協議会のテーマにして地域で競争させて、うまくいったところを表彰するなどすれば、成果が上がると思う。

【10 地域福祉をみんなですすめるしくみづくり】

(山本委員長)

これは年度末から来年度にかけて議論するテーマだが、予告編として意見をいただきたい。

(三和委員)

地域協働協議会に関する意見が多く書かれているが、現在の組織との関係をはっきりしておかないと屋上屋になる。揉めている市もあるので、そうならないようにしてほしい。

(山本委員長)

今年度は計画策定を来年度に控えているので、年度末の進捗状況の評価だけでなく、情報を共有するための会を、本日、持たせていただいた。有益なコメントをいただき感謝する。

今後の予定について、事務局より説明してほしい。

4 今後の予定について【議題第3】

(事務局 資料に基づき説明)

【補足事項】

- ・当委員会では、地域福祉計画の進捗管理として年度末に市・社会福祉協議会の事業・活動の実績を報告させていただいており、本年度も3月頃に開催させていただきたい。
- ・現行計画の期間が来年度までとなっているため、来年度は28年度からの新たな計画を策定する必要があり、年4～5回の委員会を開催する予定である。スケジュールの案は次回の委員会で御提示できればと考えており、御協力をお願いしたい。
- ・委員会規則で委員の任期は2年となっており、ほとんどの委員は平成27年3月末までとなっているが、引き続き、所属されている団体に推薦のお願いをさせていただきたいと考えている。

(山本委員長)

現行計画の期間が来年度までであるので、新たな計画を策定する。アドバイザーには他の自治体の情報などもアドバイスしてほしい。

(アドバイザー)

いくつかの市で地域福祉計画の策定に関わらせていただいております、今回のように委員の方々の活動状況をお聞きしているが、全員から提出していただいたのは初めてである。また、活動と課題が同じようなバランスで書かれているのも珍しく、皆さんが課題を意識しながら活動されていることが示されて感動している。たくさんの課題があり、マスタープランとしての地域福祉計画は大きな絵を描くものなので、具体的な議論が難しい部分もあると思うが、そうしたことも含めて、来年度に議論していただけるようにまとめたいと思う。

(山本委員長)

委員の皆さんの協力に感謝する。本当に建設的で、素晴らしい計画ができると思うが、次の世代は大丈夫なのかということが心配になった。委員の皆さんの知見を継承していくことも地域福祉の課題なので、来年度もよろしくお願ひしたい。

時間を超過して申し訳ない。本日の議論に感謝する。

(閉会)